The Water-Babies における権力・科学・歴史

森 岡 実 穂

Charles Kingsleyの多岐にわたる作品群の中でも現在も命脈を保ち最も着実に版を重ねているのは、自分の息子への献辞が付されている「児童文学」*The Water-Babies* (1863)であろう。*Alice's Adventures in Wonderland* (1865)とほぼ時を同じくして出版されたこの作品は、*Alice* と共に黄金時代と呼ばれたVictoria朝の児童文学の草分けであり、またこれも*Alice* と同様に主にファンタジーの分野において評価を得ている。しかしこの作品において最も独創的であり興味深いのは、進化論に代表される科学や歴史というような具体的な知と権威の問題が、児童文学ならではの教育的な規範化への方向性と絡み合っている点にあるのではないだろうか。

* * *

児童文学の目的のひとつは、程度の差はあれ、子供をその時々の大人社会の規範に合わせて教化することであると言えよう[1]。イギリスにおける児童文学の19世紀における隆盛は、世紀前半に盛り上がった福音主義運動において福音主義者たちが行なった日曜学校の整備に伴い読本が必要になったことに多くを負っている[2]。その他、出版事情の進歩[3]、啓蒙主義・ロマン派以降の「子供」という存在の注目などの要素も当然その急激な普及・発展に影響は及ぼしているが。このような成立事情により、児童文学は必然的に強力な倫理教育的色彩を帯びることとなった。19世紀末に近付くにつれ、児童文学においても、特に現状とは別の世界の可能性を示すタイプの物語であるファンタジーの分野において、本来内在する現行の世界観を転倒させるかもしれない潜在可能性が強く表出してくるが[4]、それは規範そのものの基盤の弱体化に呼応してのことである。まだ統一的な規範が力を持っていた60年代には、児童文学も基本的にその権威に従っている。

では具体的に19世紀Victoria朝の、特にブルジョワジーの規範とは何であるか。18、19世紀の新興勢力である彼らのアイデンティティは、他の階級に対するその倫理的な優越にあるとされていた、という説がある。これは当然ながらMax Weberの *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* に端を発する説で、彼らは自己をよくコントロールして勤勉に働く事によって神への奉仕を実践し、その意味で、働く事をせず性的に放縦な貴族階級よりも、また自律性に劣る労働者階級よりも、ブルジョワジーはより積極的に神の世界を良くしていく努力を怠らない優れた存在であり得るとみなし得る訳である[5]。もちろん当時の社会の実際の主流思想はこのような経済活動の正当化と絡んだ宗教中心主義というよりは、むしろ功利主義を筆頭とする純粋経済思想であり、またWeberの理論自体にも問題はあるわけだが[6]、少なくともこのようなプロテスタント的思想はVictoria朝の小説の中ではブルジョワの経済人たちの自己正当化の文脈ではよく見かける理屈である。今回はこの問題自体の妥当性を論ずるスペースが無いので全体的な議論はさておき、この作品に限って言うならば、前述のように児童文学というキリスト教の影響が比較的大きいジャンルに属すること、作者であるKingsleyがChristian Socialismに参加したことに示されるように社会と宗教の調和を意識して目指した真摯な聖職者であることなどから、その中で推進される中心的規範は宗教的な意味付けが大きいと考えることが可能であろう。少なくともキリスト教を中心とした児童教育と文学の領域では、この規範を大切なものとして保ち続けることがブルジョワジーの支配するVictoria朝社会の安定には不可欠と見なされており、その一環として、主に宗教的ディスコースを通じての子供の倫理教育、子供の規範への教化は非常に重要な使命を帯びていたと言える。

このように児童文学は、教育的なディスコースの集まる場であるが故に、規範化と権力発動の問題が大人の文学におけるよりもより露骨に表出しがちであると言える。今まで児童文学はその予想される読者が限定される事からどうしても特定のリーダーレスポンスに重点を置いた批評や教育学の立場からの批評の対象となりがちであったが[7]、このような側面をかんがみる時、

知と権力の問題を考える場合などには児童文学もまた十分に「大人用」の文学と同様の文学的批評の興味深い対象になると言えるのではないだろうか。

19世紀にはしかし、社会倫理の土台としての宗教は、キリスト教自体の危機によってあやうくなっていた[8]。キリスト教が絶対的な権力を長期にわたって保持することができた理由のひとつは、それがあらゆる知を規定できる唯一の権威であったことにある[9]。神はこの世の唯一の創造者として地上の一切を知る絶対的な権威であり、そして聖書は神の言葉の書として万象の判断尺度であるべきものであった。科学ももともとは、神の創りたもうた世界の精妙なDesignを聖書との呼応において示す事により神の存在とその素晴らしさを証明するという使命を持った、宗教の支持的存在であった。科学の発展は、神がこの世にあらわした真理を人間が理解するための貢献であり、よりよくこの世界を理解する事はより神の意にかなう事であった。また神の再臨に備えて世界を完成に近付けようという意味でも科学の発展は神の王国に寄与し得た[10]。しかし一方でこれが行きすぎて超越論的な聖書の真理を捨て全てを人知で把握しようとするとそれはいわゆるファウスト的な罪となってしまう。いかなる知であれ神から独立して自律的権威になる事は冒瀆的行為なのである。

科学と宗教はそのように調和的関係の下に共に発展してきていたが、経験的実証に基づく近代科学の発展は、世界の実像が聖書に書かれたものとは食い違う例証を次々と発見していく事によって自律的な「真理」としての権威を高めていく結果に至り[11]、同時に教会の知を統べる権威はこの脅威によって必然的に不安定なものとなっていった。ここにキリスト教が科学に対して抱えるジレンマが発生する。前述のようにこのような教会の知の唯一の権威としての地位を侵害し脅かすような事は冒瀆的な罪ではあるが、科学があくまで宗教の支持物として扱えるならばその高まった権威自体を利用して補強を図ることも可能なわけである。前者の立場はいわゆる宗教に対立するものとしての科学という特に19世紀以降の両者の関係の一般的解釈であり、後者は科学と宗教の和解を目的とした伝統的な自然神学の立場である。19世紀のキリスト教にとって、脅威でありながら考えようによっては支えともなりうる科学との関係は、補佐としては強くなってほしいが逆転される程では困るというアンビバレントなものにならざるを得ない状況であった。

このように教会といった絶対的権威が弱まり権威があいまいなものになりつつあった19世紀に、比較的新しく権威のコントロール手段として影響力を増しつつあったのが「歴史」であった。18世紀以来の生物学の発展が提供した「有機体」のモデルは、生物学のみならず芸術・社会思想にも影響を与え、それまでの静的・機械論的世界観は「成長する」動的・有機論的世界観へと変えられるまでになり、プロセスとしての世界という思想は、歴史の感覚を大切なものとして見いだした[12]。この植物の種子のように正しい方向性を内蔵した「成長」が過去・現在・未来を現在の観点から総合することによって、世界は常に完成へ向かってのゆっくりとした進歩の途中とみなされる。

特に18世紀末から19世紀のイギリスでは「歴史」は強力な現状肯定の手段となっていた[13]。イギリスの国体をマグナ＝カルタの時代からあくまで立憲国家として緩慢に成長してきたとみなし、この漸進的変化を完成への進歩として肯定する歴史観がWhiggean gradualismといわれるもので、イギリスは他のヨーロッパ諸国とは違い遥か昔から正しい成長の過程を歩んできて現在の成熟した立憲国家体制があるのだと自国の優れた特異性を主張するものである[14]。フランス革命のような急激な変化は自然な成長を損なうとして退けつつも進歩としての変化を支持するこの折衷的保守主義とでもいうものは、変化をも取り入れた上での現状肯定の権威として力を発揮し、現状の正当化の権威としての「歴史」の価値をよく示している。歴史は何らかの視点に基づいて再構成された主観的なものでしかありえず、その意味で本質的に主観に基づいて目的論的なのだが、そのような恣意的な読み込みとしての歴史は丁度この時代に大きな力を持つようになっていた[15]。

一方で1860年代には、既に19世紀前半の歴史の権威の正当性に関する問題が投げ掛けられていた事は注目に値する。19世紀前半の歴史家は皆アマチュアであり、その仕事の権威は知識人の「名士」としての個人の名声に依るところが大きかった[16]。この問題は19世紀中盤からのドイツ歴史科学の方法論の移入によって表面化する。Leopold von Rankeに代表される歴史科学においてはまず正しい一次資料の根拠としての使用は不可欠であり、次いで主題的価値判断を避けた事実の再構築が目指された。[17]またAuguste Comteの実証主義の影響下ではHenry Thomas Buckleが歴史においても自然科学同様の「一般法則」を求めようとするなど、[18]「科学」は「歴史」の権威の新しいよりどころとなりつつあった。当然伝統的立場の人々からは反発を受けたが、19世紀後

半にはこの実証主義と結びつく自然科学の方法論は、真理への道において宗教以外のほとんど唯一の権威と化しており、ほとんどの学問分野が科学の方法論を用いることで「科学」になりその権威を借り受けようとしていた[19]。よって1870、80年代には支持者も増加し、歴史学における「科学」の重要性は確定していく。但し、これは「真実」を語るという上での正当性の強化という問題であって、確かに歴史科学的手法はWhig的な現状正当化の歴史を「主観的」と批判して「科学的客観性」を主張してはいたが、どんなにはっきりした証拠に基づいていても結局「いかに正しく解釈するか」という問題が論争になる点に明らかなように、何らかの主観的立場を持たない事は不可能である。歴史にとって、このような科学に追従しての「客観性」の徹底した追求、もしくは「主観性」からの脱却はいずれそれ自体の存在意義に最終的に関わる問題を含んでいるとも言えよう。その意味でまた、この19世紀中盤の状況を考えた時点で既に「歴史」と「科学」は「権威」を通して絡み合っている事は注目に値する。歴史の権威の問題は、さらに他の学問分野と同様、大学その他の組織によっての裏付けを必要とするようになる。そして「歴史」はこのように方法論的に「科学」化し、また教育組織に取り込まれることによって確実にその「権威」に関する影響力を増していく。権威に対して多大な影響力をもち始めたこれら「科学」「歴史」のディスコースとキリスト教的な倫理的規範化のディスコースとの間に権威そのものをめぐる緊張関係が生ずるのは自然のなりゆきであろう。

本稿で取り扱う*The Water-Babies*という作品は、物語として大筋をまとめるという事をするならば、Grimesという親方の下で酷使される煙突掃除の少年Tomが、ある貴族の邸に仕事にいった時泥棒に間違えられ、その逃亡の途中で川に落ちて水の妖精のようなもの'water-baby'になってしまい、水中の世界で妖精の女王Mrs.Bedonebyasyoudid達のもと社会勉強をしながら一人前になっていくというもので、キリスト教色の濃い一種のビルドゥングスロマンとして考えることが可能であろう。しかし、ストーリーとすると子供向きで教訓臭の強い単純陳腐なこの作品が文学的に評価され得るとしたら、それはいわゆる主筋を支えたり混乱させたりしながら織りなしていくこのカオス的に混じり合う諸部分にあるのではないだろうか。よってこの試論は、この作品全体に対する統一的な解釈を求めるのではなく、*The Water-Babies*という規範化指向の強い文学作品において前述したような科学と歴史の二つの知のディスコースが、現行の権力に最も近いと思われる規範の支えとしてのキリスト教のそれとどのように関わりまた影響を与えているかを探ろうとするものである。この目的のため、扱う部分はストーリー全体ではなく、特にそれらの関係性をはっきり具体的に映し出している三種類のエピソードに絞った。ここに取り上げた他にも特徴的なエピソードはあるが、特に権力と科学と歴史の全てが絡んでいるものの代表としてこの三つをより詳細に検討したいと思う。

1.水中社会の階級論

川に落ちてしまった後、water-babiesのひとりとなった煙突掃除の少年Tomはその川から海に向かって仲間を探す旅に出る。道中出会った「紳士」のsalmonは、自分がより進化した生物であることをrespectableだと誇っており、一方でもとは同類だったtroutは自分たちと違って「怠け者」であるが故に川にとどまる事を選んだのでいまの両者の身分の差となっていると言い、彼らのことは「貧しい親戚」としてさげすんでいる。仲間たちと合流した後、やがて成長のための試練の旅に出た先では、彼は貴族の老嬢Gairfowlに道を聞かなくてはならなくなる。彼女は古い家柄の出で、一族の者は古きよき自分たちの種族の高貴さに固執し新しい変化を拒んだために進化からとり残され、今では彼女が最後のひとりとなってしまっているらしい。

* * *

19世紀において大きな影響力をもっていた思想のひとつに進歩主義というものがある。これはひとつには18世紀以来の生物学の発展とそれに伴う有機体説の哲学・社会思想への波及、静的世界観から動的世界観への移行に端を発する。社会を全体でひとつの有機的存在と考えた場合、植物の種子がかならず一定の段階を踏んで確実に成体となってゆくように、人間とその社会もまた諸段階を踏まえつつ本質的に内在する方向性に従って完成へと向かって進んでいるのだという考えである。理性への信頼の下に人間の無限の進歩の可能性を信じたRousseauに始まりCondorcetに代表されるような啓蒙主義もまた19世紀のこの傾向の源流であろう。進歩の可能性への信仰はユートピア的社会主義を経てComteの実証主義、Herbert Spencerの社会Darwinismに至

るまで引き継がれ続ける。またここには当然、この世の時間の経過にはキリストの再臨による千年王国の樹立という終局目的があるとされるキリスト教の伝統に依った歴史観も影響している。これらの目的論的傾向は前述した、イギリスの歴史を立憲主義の漸進的完成の過程として考えるWhig的漸進主義という形式を取って、19世紀のイギリスの代表的歴史観をかたちづくっていた。

18世紀に本格化した生物の進化という考えはそのような時代の精神と共に発展していた。少なくともDarwin以前の進化論は例えばLamarckのように多かれ少なかれより完成に近付く「進歩」を前提としていた[1]。種の進化、またそれに伴う分化という発想は「進化したもの/しないもの」という肯定/否定の規準により、進化以前よりも以後の方が「進んでいる」よりよいものとなっているという価値判断を含むことになり、それは当然進化の各段階間での優劣に基づく階級差別につながっていく[2]。19世紀の「人間中心主義」の根拠はそこにある。人間は、今までのように本質論的に他の生物と一線を画せない以上、あらゆる生物の中で最も進化=進歩したものである故に最も優れた存在であるべきなのである。このような状況をかんがみるに、Darwinの提出した進化論において最も衝撃的だった点のひとつが、完成に向かった進歩という方向性を失った、環境による自然選択という無方向の変化という発想の導入だったという事は理解に難くない[3]。それは進歩へのこの時代の強い信頼に疑問を投ずるものであり、ひいては人間自身が進歩どころか退化・絶滅する可能性をすら示唆することになるからである。そして何より、もし種の進化に必然的な進歩の方向性がなく、人間も単に相互に優劣のない偶然の分化の結果なのだとしたら、全生物を並べたスケールの中での最も優れて進歩したものとしての人間の中心的な立場は根拠を失ってしまう。

この時代の楽観的な進歩への信仰は、イギリスに関しては、この国が産業革命による発展を謳歌していたことにその現実的な裏付けの多くを負っている[4]。Herbert Spencerが*The Origin of Species* (1859)以前に自由放任経済理論をベースにLamarckismを都合よく利用して人間の進歩を説いた事は両者の関連性を示す好例であろう。現実の進歩がそれを信じる気にさせていたのである。しかし19世紀半ばになると、産業革命の急激な発展は都市問題や労働問題を引き起こし[5]、また諸外国の競争力の強化によって、イギリスの経済的発展にも陰りがさし始め、決して楽観的でばかりはいられなくなってきてはいた。そんな中でDarwinの進化論はいってみれば人々の不安の図星をついた訳である。

進化論以前の世界観の科学との折り合いを支えていたのがいわゆる自然神学である。前述のように、キリスト教は知を規定できる唯一の権威であった。よってキリスト教における知は聖書を中心に構築されていた。それに添っている限り有用な知は歓迎されたわけである。特にプロテスタンティズムにおいては、神の作品(現世)を通して神の栄光を讃える事は人間の義務であり、また人間は自らの持てるあらゆる能力をもってそれを実行する必要があった[6]。Calvin自身が、自然の研究をおろそかにする者は、神の作品を検証する際に創造者の存在を忘れる者同様に罪深いという見解を持っていた事は注目に値する[7]。自然は神のもうひとつの書であり、聖書同様に理解し讃えるべきものであった。自然の中に見いだされる法則性は神のすぐれた意図(Design)を示すものであり、Tess Coslettの言葉を借りるなら、自然の研究を通してそのような精妙な仕組みを創造した神の存在と恩寵を確かめるというのが自然神学の存在意義だったのである[8]。このように自然神学は新教国イギリスで17、18世紀を通じて非常な盛り上がりを見せ、この国での近代科学の発展の原動力のひとつとなった事は否定できない[9]。かくしてこの時代、科学はその本質的な反超越性にも関わらず、宗教の正当化のために働くと同時にその発展の動機も与えられるという状況にあり、そこにあったのは不和ではなく協調であった。19世紀の人間にとってその代表的な学者としてはWilliam Paleyを挙げる事ができるだろう。彼の*Natural Theology* (1802)はCambridgeで必読書になる程に広く影響力を持っていた本であり、Darwinも大学時代にこの本を読んで感銘を受けている。

Darwinの進化論は自然神学に最終的に取って代わってしまったものといわれているが[10]、少なくとも1860年代には自然神学の方はDarwinismとすら折り合いはつけられると思っていた節もある。極端なことを言えば、自然神学にとっては整った法則性、つまり機械論的傾向をもつ理論ならほぼ全て利用可能なのである[11]。Natural Selectionは、人間中心的価値判断とは無関係に適用されるかもしれないが、環境による適応という「法則」は存在する。それは人間には目的が理解できないにせよ一種のDesignであり、Designのあるところには神がいるはずなのだから、神義論にもっていってしまうことも可能である。実際Darwinの*The Origin*における文章では「選択」の主体として「自然」Natureが擬人的な存在と

なっており[12]、ある意味で全能者としての「神」が「自然」と入れ替わっただけではないかという解釈すら可能である[13]。少なくともそれは理神論の「神」とは矛盾しない。この点にも自然神学にとってDarwinの理論が取り込み可能な対象であった事がうかがわれる。また、Darwinの*The Origin*自体がPaleyから「適応」の概念に代表される大きな影響を受けており、その語彙にも共通するものが多かったため、PaleyはDarwinの先駆であり、Darwinの思想を巡る論争すら広い意味での自然神学の範疇での出来事と考える人もいる[14]。

この後19世紀末に向けて、妥協による随所への普及が結果的に科学の有用性 を強調しこの進化論が他分野に広く大きく影響を及ぼすことで科学のディスコースがますます強力になり、宗教のディスコースが相対的に弱体化していくうちに最終的には科学と宗教の力関係は逆転するに至る。しかし1860年代初頭の時点ではそれはまだ先の話である。Darwin自身の理論では重点は進化における無差別性・無方向性にあり、人間中心主義と進歩主義こそ彼が疑ってかかったものであったはずだったのだが、それらの点はこの時代に信じられていた思想とはあまりにかけ離れていたため、徹底的に批判されるか好意的な誤解の下に受け入れられるかのどちらかでしかなかったのである[15]。KingsleyやAsa Greyといった歴史・科学に関わる人々で進化論を評価した人たちも、結局は自然神学の枠組みの中での適用版として理解(曲解)したにすぎない。そのように宗教・倫理のディスコースに取り入れられ危険度を緩和されるというある程度妥協した形でしか広まっていけないというのが当時の諸ディスコース間での*The Origin*の立場であったと言えよう。

このような、全てをサポートと考える自然神学の流れに取り込んで解釈すれば、種の進化による分化もまたこの世界における神意の表現のひとつと考え得る。この考えから、ブルジョワ社会の階層分化の神意による正当化につなげていくのはそれほど困難な事ではない。そして何が神の意志にかなっているのかという判断規準、宗教的倫理観の土台はプロテスタント的倫理なのである。*The Water -Babies*においては、この章冒頭に挙げたようなその具体例が見られる。魚の世界で描かれている事はそのまま人間社会の戯画である。下層階級とブルジョワジーに身体的な差があるのは、下層階級の人々がなまけもので向上心に欠ける一方、ブルジョワジーは勤勉を美徳として努力を怠らないからである。貴族階級には昔日の力はなくただ滅びの日を待つばかりだが、これも彼らが余りに高いプライド故に変化していく現実に積極的に参加するだけの生気を失っているためである。このように、当時のブルジョワジーの繁栄は彼らが倫理的に他の階級の人々よりも優れている結果なのだという事が、水中生物たちの社会階層についてのエピソードを通して描かれている。例えば冒頭で挙げた自称gentlemanのsalmonの例を検証したい。彼は自分の親戚だというtroutの事をこのように語る。

> 'My dear, we do not even mention them, if we can help it; for I am sorry to say that they are relations of ours who do us no credit. A great many years ago they were just like us: but they were so lazy, and cowardly, and greedy, that instead of going down to the sea every year to see the world and grow strong and fat, they chose to stay and poke about in the little streams and eat worms and grubs: and they are very properly punished for it; for they have grown ugly and brown and spotted and small; and are actually so degraded in their tastes, that they will eat our children.'[16]

これはまさにDickensの作品に見つかりそうなVictoria朝の中産階級の俗物像である。respectableな人間に相応しくない事は極力口にしないようにという姿勢はPecksniffのようでもあるし、自分たちは勤勉な努力によって自力で今の地位を築いたという自慢げな態度はBounderbyのようでもある。そういう意味で戯画的ではあるが、彼らは一応'the lords of the fish'[17]として、その種の中では最も優れたものとして認められている。そして、今のtroutがみすぼらしくつまらない魚なのは彼らの倫理的程度の低さのための自業自得だと明言している。'properly punished for it'という表現が示すようにここでは怠慢は「罰に値する」すなわち「悪」と断定されている。これは先に挙げた、神に与えられた職業を通して自己実現を図るため勤勉と禁欲的自己コントロールを何より尊ぶプロテスタンティズムの倫理価値基準と呼応するものではないだろうか。実際troutが食いしん坊で目先の事以外は気にしない点は、Tomが「世界を見るため」川を出ようとした時に友達だったtroutに挨拶しようとしたら何か食べるのに夢中で気が付いてもらえずじまいだったという部分にさりげなく示されているが[18]、これはこの宗教的倫理のディスコースではつまり、彼が低次元の欲求に左右され禁欲的に自己を管理できていない上、「世界を見る」というような向上心にも恵まれていない怠け者であるという意味になろう。さらに、そ

うした生活態度が主体的な選択であるために責任を逃れる事も出来ないのは、彼らが「選んだ」'chose' という言葉に明らかである。ここでは既に分化の原因は「環境条件による有利な変異の自然選択」ではなく、むしろいわゆる Lamarckism 的な「動物の適応への緩慢な意志」である。このように分化の理論は目的論的な色付けをされ、(あくまで salmon/ブルジョワジーの基準による価値判断である事を忘れてはならないが)trout の外見の悪さと悪食は彼らの怠惰という「悪」の当然の報いの欠陥、倫理的な因果関係の結果として示されている。また、言うまでもないが、進化論がこのような発想にとって便利なのは、それが歴史による証明という要素を含んでいるからである。目的論的な読み替えに際して、そのような意味で進化論は「科学」「歴史」の両方の権威を担うものとして導入される[19]。

ちなみに、*The Water-Babies* において「怠惰」に対抗して「勤勉」という概念の代わりに示されている美徳は「世界を見る」'to see the world' という行為である。これは若干唐突な代案に聞こえる。このフレーズが直接関係するのはむしろこの作品では直接の言及のない帝国主義のディスコースであろう。しかし国内における「紳士」教育と海外での拡張政策には強力な共通理念が存在する。それは白人・ブルジョワジー・キリスト教徒という要素によってくくられる 'Englishman' という共同体的自己の確立であり、これを秩序の中心とした世界の再構築である。国内においては他階級の人々を、海外においては他人種・他民族を精神的・物質的に支配下におく事でそれは成立する。帝国主義的文脈上でのその過程において「世界を見る」事は全ての象徴となる。インド・アフリカへの進出はまず「探険」という未知の「世界を見る」事から始まった。次いで現地文明を未熟な発展段階とみなし、成熟したものとしてそれを助けるという「キリスト教徒としての義務の遂行」の大義名分の下に現地人の生活文化への介入へと進んでいく。さらには異教徒・異文明の地を「視線」に留まらず物質的搾取の対象とする事で実質的な「侵略」に至った。ここには勤労を通じての神への奉仕という理屈によってブルジョワジーの優越を認めたのと同じ、白人の政治経済行為のキリスト教による倫理的正当化のしくみが見て取れる[20]。そして現実的な利益を享受すると共に、「遅れた非白人(特に黒人)社会」を保護し導く「進んだ白人キリスト教社会」代表としての 'Englishman' という自己存在を、優越的・中心的な視点の中に確認する事もできたのである。「世界を見る」事は、プロテスタントのディスコースでの美化・正当化を施しながらの世界における 'Englishman' の支配的・主体的立場の確立を示唆するものである。

そしてまたこの作品において 'to see the world' という言葉は白人・ブルジョワジー・キリスト教徒といった「進んだ」優越的存在としての自律的な主体の確立と常に関わっている。前述の「紳士」salmon による trout との分化の理由がこれだったのは言うまでもないが、Tom 自身が otter の 'Now is your time, eft, if you want to see the world'[21] という言葉を受けて自力で海を目指した時、彼とそこに残った trout との間には同じ差別化が殴り返されている。また、こうして自力で海まで出たこと自体が water-babies の nursery に入るためのテストであった事も後に判明する[22]。ここを出て更に一人前の大人でクリスチャンの「紳士」になる試練の折にもこのフレーズは Mrs.Bedonebyasyoudid によって反復される。「日曜日」に Ellie がどこか別の所に行くのを見て Tom が自分もそこに行きたいと言い出した時 Mrs.Bedonebyasyoudid はまず 'Those who go there must go first where they do not like, and do what they do not like,and help somebody they do not like'[23] という条件を示している。これは自己犠牲と他者への奉仕というキリスト教的義務の遂行である。後の Grimes への「義務」実行の場面では優越者たる「紳士」は遅れた劣等者に対し保護的干渉をするのが務めという考え方がかなり明白に示されている[24]。最終的に彼のこの旅への出発を促す時に彼女は再び 'see the world, like an Englishman'[25] という表現をしている。国の内外を問わず、宗教の援用で美化と正当化を施しつつ 'Englishman' が現世での優越者として自律的な認識・秩序生成の主体となりその集団的自己の世界観を現実にしていくという目標に通じる点で、この言葉に示された見ることへの積極性[26]は特にイギリスブルジョワ社会におけるプロテスタント的倫理規範の一種の投影と言えるだろう。

貴族階級もまたこの勤勉と自己管理による積極的な自己実現を旨とする宗教的倫理との関係において、労働者階級と同様ブルジョワジーに劣った点をもつものとして扱われる。salmon と trout がブルジョワジーと労働者を表すように、この年老いた Gairfowl が貴族を体現しているのは明白である[27]。この高貴なる老婦人はバイタリティの欠如、さらに言うなら新たな進歩への勤勉な向上心の欠如のためにもう滅びていくしかない者として描かれている。彼女は空を自由に飛び回れる翼を持つ鳥たちにひどく劣等感を抱いているのだが、鳥たちはまだごく新しく出てきた輩にすぎないから翼が必

要なので、立派な出自の彼女自身にはこの古き良きスタイルを変えるつもりなどないのだと自分を納得させようとしている('They must all have wings, forsooth, now, every new upstart sort of bird, and fly.')[28]。Tomに道を聞かれてもまともに答えられないという彼女のかなり耄碌した状態は、旧家の一員としてのいまでは虚しいがしかし頑固なプライドと共に、19世紀の貴族たちの同様の状態 ――彼ら持ち前の活発なやる気の欠如ゆえの――を象徴している。彼女はもはやすっかり力を失っていて、海でも自分の活動場所を持たず、することといえばただ自分のために泣くか、静かにあきらめて死を待つかしかない。Victoria朝の貴族たちもまたミドルクラスの台頭により社会の真の中心からは追いやられてしまっている。そしてそれは、貴族自身の、勤勉を美徳とするブルジョワジーとは違う、怠惰な性情の当然の報いというように結論づけられている。

このように、この魚たちのエピソードにおいては、階級社会の現状は、進化論の文脈を都合よく利用した生物の歴史を証拠とした科学的な因果関係という権威づけのサポートを得て、倫理的な因果関係の帰結として正当化される。当然ながら、ここで利用されている「進化論」はDarwinのそれをうまく曲解したものである。このエピソードではまだ「神」に相当する存在は直接には関わっていないが、次のエピソードではこの作品における「神」的存在である妖精の女王Mrs.Bedonebyasyoudidが登場し、自然神学的な側面はより具体化する。

2. Mrs.Bedonebyasyoudidの歴史書

Mrs.Bedonebyasyoudidは、water-babiesの世界を統べる教母的な存在のなかでも監視と懲罰を専門とする、子供たちにとっても怖い存在である。当然Tomの未熟な行為にも厳しく接しているのだが、彼が「他人のために自分のしたくないことをする」という成長のための試練をいやそうにしているのを見た時、彼女は自分の書棚から一冊の写真で構成されている歴史書を取り出し、彼にその教訓を語る。それは自分の好きなことばかりして、つらいことを我慢してやるだけの向上心を持たなかったが故に人間からゴリラに退化してしまったThe Doasyoulikesという一族の歴史である。

* * *

前述のように、Darwinの進化論が同時代の人々に与えた最もネガティブな連想のひとつは、自然選択がさらに進んだ結果人間もまた退化・絶滅の危機に瀕するのではないかという恐怖である。この時代に巣食う根強い退化の不安は、Mrs.BedonebyasyoudidがTomに見せる歴史書 'The History of the great and famous nation of the Doasyoulikes, who came away from the country of Hardwork, because they wanted to play on the Jews'-harp all day long'[1]にあきらかである。Tomがいま居る楽しい子供の園を出て他人(自分をひどく扱った昔の親方Grimes)のために骨をおるのを嫌がったとき、Mrs.Bedonebyasyoudidはこの好きな事ばかりしていた者たちの歴史書を示して彼を諌めるのである。この一族はその怠惰な性質のため気候の深刻な変化について真面目に考えたり対応策を講じたりできなかったため、続いて起こった寒さと湿気が非常に厳しい状況の中多くが命を失った。より頑丈で強い男性だけが生き残り、子孫を残すことができた。よって、この荒涼とした環境の中生き残った者達はなめらかな肌が失われた代わりに毛深くなって洞窟などでも寒さに耐え得るようになるというように生存に必要な新しい形質を獲得し、同時に人間的な特徴を失っていった。この動物的な生活スタイルにあわせて、彼らは直立歩行も止めてサルやゴリラのような四足獣のようにふるまうようになり、ついには人間的な知性もあまりに使おうとしなかったが故に衰えてしまい、言葉すらも失ってしまったのである。

このエピソードの直接の教訓は、当然ながら、進化と退化における倫理的因果関係である。Mrs.Bedonebyasyoudidの本にある一連の写真は、倫理的な堕落と生物学的な堕落の関係をまざまざと見せ付ける。本を見せた後、彼女はTomに、幸福に繁栄するのもみじめに退化していつか絶滅するのも、それぞれの生物の倫理的な心構え次第だと語る。

> '... But let them recollect this, that there are two sides to every question, and a downhill as well as an uphill road; and if I can turn beasts into men, I can, by the same laws of circumstance, and selection, and competition, turn men into beasts. You were very near being turned into a beast once or twice, little Tom. Indeed, if you had not made up your mind to go on this journey, and see the world, like an Englishman, I am not sure but that you would have ended as an eft in a pond.'[2]

もちろんここは再びDarwinの進化論と *The Water -Babies*

の自然神学的立場とのズレを示す結果になっている。Darwin自身は、*The Origin*のテクストでは様々な要因により誤解を呼びがちなあいまいな表現をしてはしまっているが、進化の過程において基本的にはいかなる意図の介入可能性も認めていなかった。自然選択とはあくまで唯物的なプロセスであり、それぞれの生物自身の繁栄のために「有用な変為」をおこした「形質を持つ個体はたしかに、生活のための闘争において保存される最良の機会を持つこと」[4]以上のものではない。The Doasyoulikesの退化は、恐らくは氷河期の到来という環境の変化の中での有利な変異の自動的な選択にすぎないはずである。しかしこのテクストでは、倫理的な意図づけが種の進化に影響を及ぼし得たという主張は明白である。進化の過程における主体の意志や倫理的姿勢の影響への強調はむしろLamarckismからHerbert Spencerへと続くオプティミスティックで進歩主義的な社会Darwinismに対応するものである。しかし結局Darwinismの普及は前述のようにこの種の好意的な誤解(彼のテクスト自体がそれを誘発しているとしても)によってその毒が抜かれた事に多くを負っており、*The Water-Babies*はその代表例のひとつとして数える事ができるだろう。また、先のsalmonとGairfowlの話でも同様であったが、The Doasyoulikesの退化についてはその原因として彼らの「怠惰」という点が強調されている。プロテスタンティズムにおいては特に厳しく裁かれるこの罪悪への強調をみると、ここに示されている倫理がプロテスタント的倫理価値観と深く関わっている事はかなりはっきりすると思われる。

この歴史書のエピソードは、さらに重要な問題を顕在化している。イデオロギーへの規範化を目的とした、権力サイドによる歴史の再構築の問題である。これは知識の一部となった「過去」というものがいかに権力の影響下にあり、その表象となっているかをよく示している。前述のように、あらゆる歴史はなんらかの選択主体なしには成立しない。またほとんどの場合にはその時々の権力・政治体制の利益によって方向性を決めざるを得ない。それは回顧的にしか存在し得ない、つまり歴史家にとっての「現在」の立場を抜きには存在し得ない歴史というものの宿命であろう。そして歴史には、現在と過去の間に可能な幾多の因果関係の内ひとつのパターンのみを示すことにより、過去により現状を正当化するとともに、現状以外の可能性を排除するという効果を持つことが可能である。加えて「本」というまとまった権威を象徴する形にする事で、その効果は上がることになる。この妖精の女王は、無差別に存在する歴史的材料のうちwater-babiesの倫理教育のため適切なものを選び目的論的に再構成して「歴史書」を作り上げたのである。子供たちの側としては、教えられる事をそのまま受け取る以外にはできない。このようにこの歴史の教科書は支配的権力の規範化の力を働かせる。

ランダムに存在する事実という材料を何らかの意図付けに基づいた知へとテクスト化する事による権力の発動は既に十全に議論されたテーマであろう。ここでは更に、歴史という強力に目的論的な方法での現状正当化に加え、もうひとつテクスト化にあたって規範化をすすめる上での有効なサポートが導入されている。それは人間精神への権力作用の隠喩としての視覚へのコントロールである。西洋においては伝統的に視覚を他の知覚器官よりも優れているとみなし、また眼というものが心理と深い関係を持つと考える視覚中心主義とでもいうものが存在した[5]。特に観察に基づく事実による実証を基本とする近代科学の方法論が広まるにつれ、最も信頼できる知覚としての視覚の特権的な地位は高まった。伝統的に眼には精神の鏡としての役割が与えられていて、特に物事の理解・認識に関する語彙では眼に関するものは多く存在していたのだが、近代科学において観察と認識が対に扱われるようになるに至って、本来肉体的な作用である「視覚」は精神的な作用である「認識」と決定的に分かちがたいものとなった。よって、この文脈においては、何かを「可視化」するという事は、「認識可能にする」の狭義であると考えることができる[6]。生のままの現実にはランダムにいろいろな物が存在しているが、そのままでは解釈の可能性は千差万別であり、統一した見解は得られるはずもない。この状態は「何を見るべきか」という基準を与えられる事でのみ脱出できる。確かにこれは「同じ物を見る」つまり「共通認識」を得るための便宜上の手段であるが、問題はいったんそうした基準が与えられ内面化されてしまったならば人はそれを基にしてしか認識ができなくなるという事である。その基準から差異としてはみ出た部分を独自に判断する能力は骨抜きにされてしまう。「視覚」=「認識」のコントロールは、特定の基準・規範の内面化によって望ましくないものを各個人において自動的に排除しようという、強力かつ巧妙な権力発動の形式なのである[7]。

また同時に、同一化を求める規範化のパワーはまた、いかなる時もTomを見失う事無く見守る能力を持って

おり、間違いを犯せばすかさず罰する事ができるMrs.Bedonebyasyoudidの「監視の眼」としても具現されている。彼女はomniscientな存在であることが強調されていて、例えば最初Irishwomanとして登場した時には、Tomが逃げ出した時皆が彼を見失っても彼女だけはその居場所を知っているとされている[8]。この段階では彼女はまだ単なる彼を見守る存在にとどまっているが、Mrs. Bedonebyasyoudidというwater-babiesを教化する者という立場を得てのち、彼女の視線＝認識は彼らの内面に取り込まれ同一化されるべきものとなっていく。彼女は目の前の子供を一目見ただけでその子の行動を全て見通してしまう眼力を持っているだけでなく、[9]どんな時でもそれぞれの子供たちを視野に入れ、誤った行為をしていないか監視している。Tomが戸棚からあめを盗んだ時にも彼女はいつの間にかそれを見ていて、これを倫理に反する行為と判断してあやまたず罰を与えている[10]。彼はこのような監視と処罰の経験を通して何が正しく何が間違っていて、何が望ましく何が望ましくないかというMrs. Bedonebyasyoudidの認識判断の基準を自分のものとしていく。彼の行動はどこにいても必ず彼女にチェックされていてその裁定から逃れることは出来ないので、彼にはその眼の下す判断が示す規範を自らのものとするしか道はない。この監視の眼のomniscienceは神の全能性の隠喩であろう。このように事の善悪を判断する基準(その具現としての神)があらゆる所に普遍的に存在するという意識は強力に植え付けられ、人々を規範に従わせ思考システムの同一化が図られている[11]。キリスト教は「知を規定する最高権威」であると前述したが、当然ながら知のみならず倫理に関しても、人間のあらゆる思考・判断に対して同一のシステムを植え込もうとしていたと言える。これは*The Water -Babies*における権力作用の代表的な形と言うことができるだろう。

そして彼女の歴史書が写真によって構成されている事が「視覚(認識)の限定」による権力操作の具現の例と言えよう。また同時にこれは科学の進歩と関わっているといえなくもない。写真術は化学の進歩の恩恵を受けて出てきた成果の発明のひとつで1860年当時はまだ新しい技術だった。1830年代にイギリスのWilliam Henry Fox Talbotによって発明され、しばらくフランスのJacque Daguerreの'Daguerreotype'と競合しなくてはならなかったが、最終的にはTalbotの方式が生き残り、Victoria朝を通じてその技術は改良され続けた。1850年代にはプロフェッショナル・アマチュア共にかなりの数の写真家が存在し、町の風景やクリミアの戦場、肖像写真などを撮っていたようである[12]。

写真は確かに一見見たとおりのものの細部にわたる完全な複写であるが、その「記録可能な真実の鏡」としての権威は疑ってかかる必要がある。そこに写っているものが現実に存在するものの完全な像のように見えたとしても、そのもののどの部分を、どんな時に、どこで、どのように撮るのか、すなわち所与の現実のどのような側面を写し取るのかは写真家の選択に依っている。いくら「リアリスティック」に見えようが、それは程度の差こそあれ、写真家という主体の認識を通した産物である。

写真の潜在的なフィクション性は、1850年代には既にあきらかであった。この時代にはリアリズムだけでなくカメラによる芸術を追求しようという写真家も既に登場していた。写真は批評家の世界ではまだ芸術として認知されてはいなかったのだが、例えばOscar G.Rejlanderというスウェーデンの写真家は写真を芸術として認めない批評界に挑戦して、1857年のManchester Art Treasures Exhibitionで'The Two Ways of Life'という作品を発表している[13]。これは美徳にあふれた人々と悪徳にまみれた人々のそれぞれの人生の道を、ラファエル前派的な画面でアレゴリカルに描いた作品である。

この寓話的な写真というアイディアとMrs.Bedonebyasyoudidの写真による歴史書との方向性がかなり近いものであることは想像に難くない。この写真が芸術的フィクションであるのに対し、彼女の本の写真は事実を忠実に記録したドキュメンタリーものであるとされているが、両者は強い教育的意図を内包しているという点を共有している。どちらも、そこから理解されるべき事は何かについて明確な意図をもって再構成されたものなのである。問題は、写真というものは、芸術作品と断られたりしない限りは、それがどの程度の恣意性を持って生み出されたものなのかが判別しにくいことである。この意味で写真は文学フィクションにおけるリアリズムと同様の潜在的リスクを負っている。これら二つはフィクション性が表に出にくいために現実そのものの証左として過剰な信頼を得た権威となってしまいがちなので、ひいては最も巧みに人を欺きうる危険な表現手段となり得るかもしれない。その強力な権威は、実際には「見るべき物」を主観的に限定されているのに、何のバイアスもかかっていない現実を見た気にならされてしまい得るだけの説得力を持っている。よってこの歴史書は、目的論的歴史の援用に加え、写真という媒体の利用によって二重に目に見えない内

面化された恣意性を内包しているといえよう。

このように *The Water-Babies* の世界において Mrs.Bedonebyasyoudid が人類の過去に対し持っている圧倒的な優位は、Tom及び読者の過去に対する視点を限定し、倫理と進化との因果関係を裏付けるような恣意的に再構築された歴史を作り出す権力としてあらわれている。管理された知の代表としてのこの The Doasyoulikes についての歴史書が、書物という具体的な形で文字通り彼女の「手中にある」のは大変示唆的である。

3.狂気の処方箋

Tom が泥棒と間違えられたお屋敷の令嬢 Ellie は母親と一緒に海岸の別荘に訪れており、その家庭教師として科学を専門とする Professor Pttmllnsprtsが同伴している。Ellie と二人で海辺を散策中、彼は water-baby の姿の Tom を発見しアルコール標本にしようとする。Ellieはそれを止めようとして Tom は無事水中に戻れたのだが、彼女までも海に落ちてしまい、water-baby の仲間になることになる。しかしこのてんまつを目撃しつつも、彼は科学者として、water-baby のようなものを見たとは言えない。この彼の態度に怒った年とった妖精が彼に様々ないわゆる「伝説的な架空の生物」を見せたため、肝をつぶしてそれらの事を語る彼は気狂い扱いされてしまう。彼のために医者たちが集められ、そこで施された様々な古今の狂気への処方とその施療結果が示される。

* * *

いままで示したエピソードにおいては、科学は基本的に昔ながらの自然神学的ディスコースにおけるキリスト教倫理の支持的存在という立場から、宗教とは互いに調和するものとして示されてきた。その補強材料として「歴史」が使われてきたのも見た通りである。しかし一方でこの作品には、科学はキリスト教に対してこのように調和的にではなくむしろ闘争的に関わっているという現在の主流の意見に近い観点からのエピソードも存在している。それがここで扱う「プロ」科学者と狂気の治療法史のエピソードである。

科学の権威への攻撃は次の二点を通して示される。ひとつは科学の歴史である[1]。歴史、特に 19 世紀の歴史がその目的論的な性質の故に強力な現行権力体制肯定装置となっている事は前述のとおりである。特に科学史とは、常に現在有効な真偽に基づいて価値判断が下されるという意味で非常に目的論的な歴史である。ここでは、その目的論的な歴史というもの自体を解体してみせることによって、その歴史も内容も永年にわたる揺るぎない権威ではないことを示唆するのである。もうひとつが科学の文体に対する攻撃である。科学の文体になぜ攻撃対象とするだけの権威があるのか。それは科学が「真理」に関して大きな権威を持っている事と関係する。科学的事象の描写には日常の言語に比べ格段に精密な表現を必要とする。可能な限り主観性を排除し、規則的で普遍的な認識と呼応した客観的・規則的な言語を用いることで誰もが共通の認識を得られるというのが科学の文体と用語のアイデンティティである[2]。故に文体としてはより簡潔に必要事項を伝達できかつ誤解の余地が少ない分類的でシステマティックなものが望まれ、また科学の側の必要から日常とは独立した語彙が発生するに至った。近代科学の言語と概念は相補的な発展をたどっているのである。科学はこのようにその理解に概念と平行した独自の言語の習得を必要とすることになり、よって再び素人には難解なものとなり、専門家による知の囲い込みが再現する重要な原因のひとつとなった[3]。19 世紀に進んだこの科学の専門職化は、一般向けの啓蒙の域を超えての一般人の実証科学の現場へのアクセスを困難にしたが、一方で熱心な啓蒙活動の結果科学の有用性と正統性の権威は広く認知されるに至り[4]、あらゆる分野で「真理」申し立てにあたって科学による裏付けというものが必要になったためそのアクセス権を独占している科学者の権威が上昇した。もちろん科学の専門特化には、実験そのものの高度化や、歴史分野同様の大学・学会という場での知の取りまとめの動きも重要な原因であるが、科学的文書特有の文体と語彙はもっとも分かりやすい形で科学が一般人の手の届く範囲を超えている事とそれ故の科学者の「真理」に対する権威を象徴していると言える。よって、科学の文体自体が精緻さを目指すためのその形式主義ゆえに意味の混乱・空洞化を容易に引き起こし得る事が示されたり、文体と内容の必然的な結びつきが破られたりする時には、その権威に問題が生じてしまうのである。

科学の絶対的な権威は、まずこの家庭教師である科学者への厳しい批判的な描写によってあやうくされる。彼の風刺的な人物像は、主に科学という分野の文体的側面から描かれている。まず、彼の名前 Ptthmllnsprts は、ポーランド人の名字という言い訳はされているが、母音を欠いた子音の羅列でしかなく、一般人にとっては

意味も発音も示さない記号であり、その意味でラテン語を駆使した科学の用語に通じるものである。(ちなみにColin Manloveによればこの名は 'Put-them-all-in-spirits' から母音を抜いたものという事である[5]。)また、彼の専門分野の正式な名称が 'necrobioneopalaeonthydrochthon-anthropopithekology' というのも悪い冗談である。ラテン語の使用によってもっともらしく聞こえるが、実際にはこの名前はNecro-(死、死体)、bio-(生)、neo-(新しい)、palaeo-(古代の)、hydro-(水の)、chthon(地下に生息する)、anthropo-(人類の)、pithek-(類人猿の)などの相反する接頭詞が並べられたもので矛盾に満ちている。

彼はまた 'the new university which the king of the Cannibal Islands had founded'[6]に奉職している者である。19世紀中盤には、科学その他の専門化が進みつつある知の分野では、研究者はそれぞれ大学などの組織による権威付けを必要とするようになっている。知はこうして一般的な知識のレベルを離れて専門化すると同時に、かつての博識でならしたアマチュア紳士の「賢者」を排斥し、大学や病院の中で純粋培養されていく。しかし、倫理という制限なしにこのように無制限に知を追求する姿勢は、知を規定する絶対権威であるべき神に挑戦するファウスト的な冒瀆行為である。科学は、キリスト教のサポートとしては強力であるべきだが、それを超えて自立することは許されないのである。キリスト教的なモラルを顧みず異教の食人族の王の大学で働こうという彼の設定は、科学の権威が倫理から乖離して専門機関に依拠するようになったことを極端な形で提示し、倫理の問題をともするとないがしろにして新たな最高権威にならんとする科学への不信を表明していると言える。

科学についての歴史的な視点は、古今に渡る('from Hippocrates to Feuchtersleben'[7])一連の処方箋によって導入される[8]。これはwater-babiesの存在を認めなかったこのProfessorが、怒った年配の妖精に一角獣などの「想像上の生物」を見せられてしまい、そのため気狂い扱いされた時に集められた「妖精を見てしまった者への処方」である。この設定は当然、科学的実証を絶対とする余りに超越的なものへの信頼を失うことへの警鐘である。

前述のように、19世紀においては科学は唯一の絶対的な真理、絶対的客観性のディスコースとして特権的な地位を固めつつあった。しかし、過去を振り返れば、科学が客観性のシンボルとなったのは17世紀以降のことであり、それ以前には錬金術や魔術まがいの民間療法などまでも人間の身体や自然の事物の性質についての研究としてのいわゆる「科学」に含まれていたのである。これらの処方箋で見られる頭に番号をつけての箇条書きのスタイルは、科学的文書のシステマティックな客観性を強調している。しかし、この見かけの科学的明晰さとはうらはらに、その内容はいわゆる19世紀の科学という意味付けからは程遠い。このリストは、例えば、'a ram's brain boiled in spice', 'Water of Nile', 'Hare's ears' といった魔術書にでも出てきそうなあやしげな材料すら挙げている[9]。'Bullying', 'Bumping' もしくは 'A double-barrelled gun and pointers, and leave to shoot three Wellington College boys a week (not more) in case black game were scarce' 等の過去にすら医学・薬学のディスコースとは無縁なものも混入している。一応これらのディスコースに一度はあったと思われるものに絞って考えると、民間療法で狂気その他に効果があるとされていた植物もいくつかがこの記録に載っている。冒頭に挙がった 'Hellebore' は古代人の用いた狂気の薬である。'Borage'(発汗剤),'Cauteies'(焼灼術),'Bezoar stone'(羊などの体内結石、昔の解毒剤)等はかつては有効とされた医療の一部だったものである。有名なところではmandrakeが挙がっている。これは麻薬としてのみならず下剤、媚薬、果ては懐妊促進剤としてすら重用されていた。このように形式主義に表明されていた近代科学の権威は裏切られ、その文脈での取捨選択以前の周縁域を含む未整理の過去が露出してしまう。近代科学とは基本的にその時々に到達している合理性の体系にかなうものだけをその要素と認めることにより常に正しくあり続けられるという仕組みになっている。これは不可避的に常に「現在」の視点から書きかえられる「歴史」と同種の構造をもっている。その意味で両者はともに強力な、目に見えない修正力を持った現在中心的・目的論的なものであると考えられる。しかしまずここではこの時点で不適格となっている周縁的な要素を引っぱり出してきて「科学」「歴史」が共に見えない所で行っている排除のシステムを公にし、不連続面を明らかにする事で「科学」の完全幻想[10]が挑戦されているのである。また、客観的かつ経験的な事実の証拠に基づくという点が自然科学の方法論を真理への強力な権威とした要因のひとつだとは既に述べたが、この点も巧みに利用されている。この報告書においては、過去の「乗りこえられた」はずの治療法がわざわざこの教授で「人体実験」されてあらためて無効を宣言されている。過去の不連続性は科学の権威によって裏付けられてしまう。ここでは「科学」の方法論による「科学」の歴

史が、目的論的な歴史を支えている「科学」の権威をおとしめる事に使われているという奇妙な事態が起こっているのである。

科学が既に知の領域において特権的な地位を占めていた19世紀だが、学究的な科学の周縁的な領域は存在した。このリスト中でのその興味深い例は'mesmerism'[11]であろう。動物磁気説に基づいての「科学的」催眠療法で、1780年代にはパリで一斉を風靡したが、創始者Mesmerや弟子たちの努力にもかかわらず、科学としての妥当性を学会に認められる事はついになく、フランス革命に紛れて流行も終わってしまう[12]。しかし1815年のMesmerの死後も彼の後継者たちはヨーロッパのみならずアメリカにまで進出してmesmerismの普及に努める。イギリスには骨相学者Dr.John Elliotsonによって移入され、Bulwer-Lytton、Carlyle、Thackeray、Dickens等の作品にも影響を与えている[13]。1840年代にはHarriet Martineauの*Letters on Mesmerism* (1844)他これに関する出版物が相次ぎ、フランスに半世紀ほど遅れてこの治療法はイギリスの人口に膾炙するに至るのである。この世紀を通じて、Balzac、Hoffmann、Hawthorneなどの文学者に描かれ続けた一方、Du Maurierの*Trilby* (1894)などにに見られるような見せ物催眠術としてもその知名度を失う事無く、20世紀にFreudの精神分析によってふたたび権威的「科学」の手段に引き上げられるまで生き残るのである[14]。このようにmesmerismは学問的権威は 得られない半ばオカルト的な存在でありながら、19世紀のヨーロッパでは広く信奉されていた民間療法としてみなす事ができる。少なくとも当時の一般の人間にとって、催眠状態という特殊な状態で人間の精神を操るように見えるmesmerismはあやしげながらも全くインチキとも思えない微妙な存在であったと思われる。主流の科学の権威が着実に上がっていく一方で、19世紀後半のイングランドではmesmerismより更にきわもののオカルティズムが一般人のみならず知識人の間でも大変に流行していた。中でもspiritualismは19世紀のオカルト的擬-科学のうち当時最も流行していたもので、処方箋のリストでも、降霊術でおりてきた亡霊がテーブルなどを叩く'spirit-rapping'、同様にテーブルなどをひっくり返す'Table-turning'などが列挙されている。これら二つは、当時民間では未だ擬-科学と見なされていたと思われるが、20世紀の現在では全くその位置を失ってしまったものの好例であろう。歴史の進行によって認識が変更される実例でもある。もちろん当時にしろそれらが正統派の科学でなかったことは明白ではあるが、このような微妙な立場のものがリストに混入されているという事によってオカルトが周縁とはいえど一応科学として見なされる程に何が「科学」なのかという事が曖昧であると示されれば、そこに見かけほどの正統性と権威を感じられなくなるのは当然のなりゆきであろう。

この部分の科学風刺で最も痛烈なもののひとつは論文や処方箋といった科学に関連した文書に特徴的にみられるような硬直気味の形式主義と術語への拘泥に向けられている。ラテン語や特定の接頭詞・接尾詞を用いての厳格・システマティックでかつ日常用語と遊離した言語の規定は、プロフェッショナルな学問としての科学の権威を表象するものであるが、ここでは一般人には意味不明だが妙に規則性を持つ言葉として混乱を呼ぶパロディの対象となってしまうのである。前述のようにこの一連の処方箋は科学的文書のスタイルを踏襲しようとしており、それに見合う語彙を使おうとしている。しかし今述べたように、近代科学というものとそれ以前の歴史との間には避けがたい大きなギャップがあり、そのためこの時点で「科学」と見なされていないものについては、この権威的な文体が奇妙な不釣り合いなものとなってしまうという事が起きる。この時点で既にまともな「科学」と考えられていないような事がこの無機的・客観的な文体で伝達される時、そこには意味と文体の乖離が生じ、そこに書かれた言葉の意味をどのように受け取るべきなのかについて混乱を呼んでしまうのである。

このリストにおける言葉の意味破壊は、複数の意味を持つ接尾語 -pathyによる言葉遊びにさらに顕著に展開される。科学的術語の特徴であるシステマティックな規則性を逆手にとって、最も明確な内容指示を目的とした言語を最も曖昧な状態に陥れてしまうのである。周知のように、-pathyという接尾語の意味は「－療法」という意味と「－病(症)」また「苦痛・感情」という意味に大分される。'Homeopathy(同毒療法)''Hydropathy(水療法)'といった現実に存在する治療法の名前に加え、'Pyropathy''Geopathy''Atmopathy''Hermopathy''Meteoropathy'等の架空の治療法がもっともらしく列挙されている。さらには'Sympathy''Antipathy''Apathy'などの「－療法」の意味ではないが同じ語尾を持つ言葉までが紛れ込まされているのである。科学のディスコースにおける機械的な命名法を、意味の脈絡は無視して形式の類似性だけで組まれたこの分裂症的なリストは徹底的にからかっている。科学の用語は一般にはなじみがないだけに

どこまでが本当かは読者には(特に子供の読者には)簡単には測りかねるはずだが、次のような、種明かし的にあからさまな意味のないフレーズを見るに至ってはその意図は疑いようがない。

> With all other ipathies and opathies which Noodle has invented, and Foodle tried, since black-fellows chipped flints at Abbeville – which is a considerable time ago, to judge by the Great Exhibition.[15]

このように、この一連の処方箋は科学的文書の体裁をとってはいるが、科学の分野で成されてきた事の玉石混合のカタログが示すその権威の歴史の浅さと、その形式主義をもてあそんだ理論的な言語のパロディによる破綻とが、いまや絶対的に見える科学の権威の実質はいかばかりなのかという疑問を提示するのである。

このエピソードの駄目押しのアイロニーは、この処方をされたあわれな科学者にとっての最良の治療は、妖精を信じなかった故に妖精に見せられた、その「幻影」についての本を書くことだったという点である。本を書くことにより、コントロールできない未知の可能性を持った生のままの事実を、安定した理解可能な知識とする事がいかに人を安心させるか、がよく示されていると言えるのではないか。物語の筋の上では、彼は本を書くことでこういう妖精の存在を信じるようになった、つまりは超越的なものへの信頼を取り戻した事で科学のファウスト的暴走の危険から逃れ「成長」した事になっているのだが('[he] became ever after a sadder and a wiser man'[16])、結局は言語による固定というステップは科学者が対象を認識するにあたってはどう転んでも不可欠なのだと、治療にあたった医師たちも彼も共に知っていたという事なのではないか。

* * *

*The Water-Babies*における科学と歴史、宗教・規範のディスコースの関係はこのように微妙なものである。科学の知の権威としての暴走を防ぎ知における宗教・規範の優位を守るため、恣意的な統合以前の歴史的な諸要素の、本来のランダムに散らばった状態を明らかにしてしまう事によって、科学の歴史が、科学の方法論に従った裏付けによって、目的論的な歴史にとっての新しい支えであるはずの「科学」の権威をおとしめる事に使われているという奇妙な事態が起こっているのである。しかもここで傷つけられるのは科学だけではない。歴史もまた、その目的論的な統合が崩壊する可能性を示唆される事で信頼性を傷つけられるのである。進化論に関して示された 進歩思想的曲解に基づいた目的論的な歴史が存在する一方で、そのような傾向を排除しようとした歴史の一例としての独特の科学史によって別の歴史観の存在が示され、その独占的な権威に疑問の余地をあたえてしまう。文体のパロディや内容の選択の意図的な逸脱などはあるにしても、この科学史が権威に対して問題になるのは、何よりとにかく一応科学のあやしげな過去をひととおりあばいている事にあるからだ。歴史の価値は、価値判断をすること自体の正当性に関する強力な権威となりうるところにあったはずだが、これでは、自己矛盾を表面化することで科学のみならず他の所で使っていた目的論的な歴史の権威をも傷つけてしまうのである。また、これは歴史学内部での「科学的客観性」追求がいずれもたらす不可避の問題をも示唆している。歴史も、また科学そのものすらも、最終的には任意の視点からの現実の「解釈」でしかあり得ない以上、「主観の排除」の行きつく先は徹底した相対主義か全くの事実の羅列でしかない。その意味で歴史にとって(そして科学にとってすら)「客観性」というのはその存在にとって難しい問題をもつものである。

目的論的な歴史がMrs.Bedonebyasyoudidの歴史書に具現化されているように、このテクストには不連続な歴史もその具体的な姿を現している。TomとGrimesが仕事で訪ねたHarthoverがそれである。この邸は'Harthover had been built at ninety different times, and in nineteen different styles'[17]というように屋根裏はAnglo-Saxon、四階はNormanという風に始まって各時代の様式をごたまぜに累積してしまってきた建物である。ナレーターはこの家を'the house looked like a real live house, that had a history, and had grown and grown as the world grew'[18]つまり一種のwhig的有機的進歩史観と対応するものとして評しているが、この強烈な外見の不統一をあらわにしてしまった後ではその表現には疑問が残る。この姿がカオス的な自然そのものの表象という意見もあるが[19]、そう言うならば今度は進歩史観と矛盾で一杯のこの有機的自然の連関自体が問題になってしまうのではないか。

この妖精の女王の歴史書とつぎはぎの邸という二種類の相反する歴史が共存するのが*The Water-Babies*の世界である。そしてここにこの作品において同時代の歴史ディスコース内での問題が、そして更なる解体の可

能性が顕在化しているのではないだろうか。科学のディスコースにしても然り、肯定的態度での利用と徹底した権威のはぎとりが、宗教との権威についての関係をめぐって共存するはめになっている。これをさらに敷衍するならば、このテクストにおけるこの混乱した規範・科学・歴史の間の関係は、科学も宗教も真剣にしかし単純に信頼していた作者Kingsleyの内部での本人の気付いていない不可避な混乱の、規範的なジャンルの作品ならではの露骨な表出とも言えるであろう。または、広くは1860年代という時代、まだファウスト的罪という言葉が意味を持ちそうな程度にキリスト教が力を持ってはいたが規範化への絶対的な求心力は既に失われ、代わりに科学の権威が追い上げて歴史を含む各分野に影響を強く及ぼし既存の力関係にズレを生じさせ始めていた時代における各ディスコース間の緊張関係を素直に映し出しているとも言えるだろう。

NOTES

(1) 児童文学における倫理教育、規範化的役割については以下を参照。John Rowe Townsend, *Writing for Children: An Outline of English-language Children's Literature* (Garnet Miller, 1965; Fifth ed. Bodley Head, London, 1990), J.S.Bratton, *The Impact of Victorian Children's Fiction* (Croom Helm, London, 1981), Judith Rowbotham, *Good Girls Make Good Wives: Guidance for Girls in Victorian Fiction* (Basil Blackwell, Oxford, 1989), Jack Zipes, *Fairy Tales and the Art of Subversion: The Classical Genre for Children and the Process of Civilization.*(Heinemann, London, 1983)p.1 - 11.

(2) Bratton, Ibid. p.14 - 15.

(3) Bratton, p.20, Rowbotham, Ibid. p.4.

(4) Zipes, Ibid. p.99 - 133.

(5) Max Weber, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism.*(tr.Talcott Parsons: Counterpoint, London, 1985) 経済活動の宗教的正当化については p.80-83、禁欲的自己管理については p.157 - 163。

(6) Weberの論については、言及対象がスイスのCalvinism、アメリカ・イギリスのPuritanismなど曖昧でご都合主義であるなど問題も多い。上記の版のTalcott Parsonsによる序文を参照。

(7) 児童文学再評価の必要についてはPeter Hunt, *Children's Literature: The Development of Criticism* (Routledge, London, 1990), Introduction p.1 - 13.

(8) キリスト教危機の理由には、科学の脅威の他にも聖書批評やOxford Movementなど様々な要因が重なっているが、ここでは科学による知の問題に絞って論じた。

(9) キリスト教による知の規制についてはErnst Mayr, *The Growth of Biological Thought: Diversity, Evolution, and Inheritance.* (The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1982), p.307 - 310,

(10) John Hedley Brooke, *Science and Religion: Some Historical Perspectives* (Cambridge University Press, Cambridge, 1991) は、宗教と科学の過去の調和的な側面の再確認に力を入れている。

(11) Brooke, Ibid. p.54、Mayr, Ibid. p.310.

(12) M.H.Abrams, *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition.* (Oxford University Press, Oxford, 1953), Ⅶ. The psychology of Literary Invention: Mechanical and Organic Theories,p.156 - 183. 有機体論の拡大についてはSally Shuttleworth, *George Eliot and Nineteenth-century Science: The Make-Believe of a Beginning.* (Cambridge University Press, Cambridge, 1984) p.1 - 23.

(13) 19世紀における現状肯定装置としての歴史については Ian Small, *Conditions for Criticism: Authority, Knowledge, and Literature in the Late Nineteenth Century.* (Oxford University Press, Oxford, 1991), p.45 - 47、Philippa Levine, *The Amateur and the Professional: Antiquarians, Historians and Archaeologists in Victorian England, 1838 - 1886.* (Cambridge University Press, Cambridge, 1986) p.75 - 87. Michel Foucaultは 'Nietzsche, Genealogy, History' in Paul Rabinow(ed.), *The Foucault Reader: An Introduction to Foucault's Thought.* (Pantheon, New York, 1982; rp.Penguin, London, 1991) においてこうした歴史の目的論的方向性と、それに伴う本質主義の正当化を批判し、系譜学Genealogyを提唱した。但しこの系譜学も、現在発効中の強力な中心化に対してそれ以外の可能性を示すに留まっており、それもまた別の視点からの読み込みであるに過ぎず中心化以前の状態を完全に再現するという事はありえない点は誤解を避けるべきであろうが、本稿の歴史観の解釈は基本的に

ここに示された歴史への問題意識を基にしている。

(14) Whiggean gradualism については、J.W.Barrow, *A Liberal Descent.* (Cambridge University Press, Cambridge, 1981) p.30－35. Small, Ibid, p.46.

Foucault が上記論文で 'the English tendency in describing the history of morality in terms of a linear development－in reducing its entire history and genesis to an exclusive concern for utility'(Ibid.p.76) と評しているのはこれを指しているのであろう。

(15) アマチュアリズムについては Small, Ibid, p.41, 45.

(16) Small, Ibid. p.48－53, Levine, Ibid. p.76－77.

(17) Ernst Breisach, *Historiography: Ancient, Medieval. and Modern.* (The University of Chicago Press, Chicago, 1983)p. 229－238.

(18) Small, Ibid. p.66, Breisach, Ibid. p. 274－275.

(19) Small, Ibid. p.20－24, Levine, Ibid. p.135－163.

1.

(1) Mayr, Ibid. p353. 374. 516, Gillian Beer, *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-century Fiction.* (1983; ARK Edition. Routledge & Kegan Paul, London, 1985) p.139, Robert Young, *Darwin's Metaphor: Nature's Place in Victorian Culture* (Cambridge University Press, Cambridge. 1985)p. 16.

(2) Beer, Ibid. p.19－26,

(3) Young, Ibid. p.85, Beer, Ibid. p.16. 23. 43. 139.

(4) 進歩史観と産業革命の Herbert Spencer を通しての絡みは J.W.Barrow, *Evolution and Society: A Study in Victorian Social Theory.* (Cambridge University Press, Cambridge, 1966)、6. Herbert Spencer, p.179－227、John C.Greene, 'Biology and Social Theory in the Nineteenth Century: Auguste Comte and Herbert Spencer' in Marshall Clagett(ed.), *Critical Problems in the History of Science* (University of Wisconsin Press, Madison, 1962), p.428－442.

(5) この問題が特にこの時期の Kingsley の関心であった事については Susan Chitty, *The Beast and the Monk: A Life of Charles Kingsley.* (Hodder and Stoughton, London, 1974) p.215－6.

(6) R.Hooykaas, *Religion and the Rise of Modern Science.* (Scottish Academic Press, Edinburgh, 1972), p.105－106.

(7) Hooykaas, Ibid. p.106.

(8) Tess Cosslet, (ed.), *Science and Religion in the Nineteenth Century.* (Cambridge University Press, Cambridge, 1984) p. 2.

(9) Hooykaas, Ibid. chapter V Science and The Reformation, p.98－149、Brooke, Ibid. p.22－31, 109－116.

(10) Mayr, Ibid. p. 515.

(11) Young, Ibid. P.14－15, P.43.

(12) Beer, Ibid. p. 53. 68, Mayr, Ibid. p. 518－9, Young, Ibid. p. 92－99.

(13) Mayr, Ibid. p. 519.

(14) Young, Ibid. P.12

(15) Young, Ibid. P.99－112

(16) Charles Kingsley, *The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land Baby.* (Oxford University Press, Oxford, 1995) p.68－69.

(17) Kingsley, Ibid. p.59.

(18) Kingsley, Ibid. p. 62.

(19) Young, Ibid.p.17.

(20) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830－1914.* (Cornell University Press, Ithaca, 1988), p.23. この件についての Kingsley 自身の見解が同ページに引用されている。'Each people should either develop the capabilities of their own country, or make room for those who will develop them. If they accept that duty, they have their reward in the renovation of blood, which commerce, and its companion, colonization, are certain to bring.' (from Charles Kingsley, 'Mansfield's Paraguay, Brazil, and the Plate', in his *Miscellanies*, 2 vols, Parker, London, 1860)

(21) Kingsley, Ibid. p. 62.

(22) Kingsley, Ibid. p. 100.

(23) Kingsley, Ibid. p. 122.

(24) Kingsley, Ibid. p. 172－5.

(25) Kingsley, Ibid. p.131.

(26) 「見る」という行為に含まれる権力性については次章で論ずる。

(27) Beer, Ibid. p. 129.

(28) Kingsley, Ibid. p. 136.

2.

(1) Kingsley, Ibid. p.126.

(2) Kingsley, Ibid. p.131.

(3) Beer, Ibid. p. 24.

(4) チャールズ・ダーウィン『種の起源』(上)(八杉竜一訳、岩波書店、1990) p.170.

(5) 視覚中心主義 ocularcentricism については Martin Jay, 'In the Empire of the Gaze: Foucault and the Denigration of Vision in Twentieth-century French Thought', in David Couzens Hoy(ed.), *Foucault: A Critical Reader.* (Basil Blackwell, Oxford, 1986) p.175 - 204 による。

(6) Michel Foucault, *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences.* (Gallimard, Paris, 1966; English tr. Tabistock, 1970; rp. Routledge, London, 1989) 博物学における認識方法の確立と専門用語の形成はその最も具体的な一例である。p.128 - 145.

(7) Michel Foucault, *Discipline and Punish: The Birth of the Prison.* (Gallimard, Paris, 1975; English tr. by Alan Sheridan, Allan Lane, 1977; rp. Penguin, London, 1979) Panopticism p.195 - 228. この点において Foucault 中期の権力思想は、前期の考古学での認識におけるヒューマニズムの中心化への専制を、現行の権力関係での認識の規範化による権力発動に敷衍させたものとして見る事ができるだろう。

(8) Kingsley, Ibid. p. 21.

(9) Kingsley, Ibid. p. 106.

(10) Kingsley, Ibid. p. 116 - 119.

(11)) この Mrs.Bedonebyasyoudid の Omniscience による支配刷り込みは、Foucault, *Discipline and Punish* の全能の監視の眼を内面化させる panopticism の特定の空間を利用しないでの具現と言えよう。cf.'The Eye of Power'(1977), in Colin Gordon(ed.), *Michel Foucault: Power / Knowledge* (English tr.by Colin Gordon, Leo Marshall, John Mepham, Kate Soper, Harvester Wheatsheaf, London, 1980)

(12) 写真の歴史については *The New Encyclopaedia Britannica* (The New Encyclopaedia Britannica Inc., Chicago, 15th edition in 1974, rep. in 1985), vol.25, p.788.

(13) Ibid. p.792.

3.

(1) 科学史の問題については Brooke, Ibid. p.36. また Gary Gutting, *Michel Foucault's Archaeology of Scientific Reason* (Cambridge University Press, Cambridge, 1989) における '1. Bachelard and Canguilhem' p.9 - 54.

(2) Beer, Ibid. p. 89. 科学の言語における安定した意味伝達の確立は当時注目されていた重要問題であった。

(3) 専門職としての一般との線引の条件については J.B.Morrell, 'Professionalisation', p.983. 特に言語について Steven Shapin, 'Science and the Public' p.993 - 995. in R. C. Olby, G. N. Canter, J. R. R. Christie, M. J. S. Hodge (ed.) *Companion to the History of Modern Science.* (Routledge, London, 1990)

(4) Shapin, Ibid. p. 995.

(5) Colin Nicholas Manlove, *Moden Fantasy: Five Studies.* (Cambridge University Press, 1975) p. 18.

(6) Kingsley, Ibid. p.81.

(7) Kingsley, Ibid. p.90.

(8) 随所に出現するこのようなカタログ的文体についてはラブレーの影響も指摘されている。Kingsley, Ibid. p. xv. Introduction by Brian Alderson.

(9) 処方箋の内容はすべて Kingsley, Ibid. p.90 - 93 から。

(10) 当然ながら科学は、客観的な事実に基づくとはいっても、着目する部分を極力限定して意味を見いだすことに成功している、条件付けを最大限にはっきりさせた上でのある主観的「解釈」にすぎない、という側面を持っているためその客観性は相対的な問題である。同様に、実証主義的歴史もその中心課題が 'correct interpretation of sources' (Jerzy Topolski, *Methodology of History,* D.Reidel Publishing Company, INC. 1976, p.111.) という点にあきらかなように、最終的には「解釈」である。

(11) Mesmerism については Maria M. Tatar, *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature* (Princeton University Press, Princeton, 1978), R.Darton, *Mesmerism and the End of the Enlightenment.* (Cambridge University Press, Cambridge, 1968), Fred Kaplan, *Dickens and Mesmerism: The Hidden Spring of Fiction.* (Princeton University Press, Princeton, 1975)

(12) Darton, Ibid. p.47 - 80. Tatar, Idid. p. 3 - 34.

(13) Tatar, Ibid. p.189 - 91, Kaplan, Ibid. p. 3.

(14) Nina Auerbach, *Woman and the Demon: The Life of a Victorian Myth.* (Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1982) p.15 - 34.

(15) Kingsley, Ibid. p.93.

(16) Kingsley, Ibid. p.94.

(17) Kingsley, Ibid. p.14.

(18) Kingsley, Ibid. p.15.

(19) Manlove, Ibid. p.26.